

となど、筆者は知る由もなかった。ただあの疾風怒濤のような事件がなかったなら、自分が今東京外大の教師をしていることもなかったと思う。ハネ上り、無責任、独善的といろいろな全共闘に対する批判はあろうが、彼らの提起したほとんど解決不能な問題の解をもとめて一生苦闘している人間は想像以上に多いと確信している。

筆者がロシア思想史という学問分野に惹かれたのも、そうした雰囲気の中での自主的読書会からだった。大学側のロククアウトが長引くなか、五月に唯一残っていた単位を充足するべく卒業論文を執筆し、六九年六月三十日に卒業証書が送られてきたのだった。

そして卒業から五年経った七三年の十一月、石山正三学生部長の訃報に接した時の衝撃は今も忘れない。二度目の学生部長として学生との団交に明け暮れ、積み重なった疲労が原因であることは明らかだだった。

決して嘘のつけない性格で、クラス雑誌のアンケートの「将来の希望」欄に堂々と「学長」と記すような人だだった。野心家であったのは事実だが、虚栄心とは無縁な人だだった。「すべてに對して一本筋の通った石山先生の気骨ある態度」と当時の在学生在が記すとおりの人だだった。まだ五十代半ばだったが、勤続三二年八か月と外語では最古参の教授だだった。合掌。

十 紛争前後から現在まで

一九七四（昭和四十九）年の和久利誓一の停年退官に伴って原卓也が学科主任となり、札幌大、北大を経て、外語に着任した新田實（昭和二十九年卒）、磯谷孝、また石山、和久利の後任である飯田規和（昭和三十年卒）、志水速雄（昭和三十六年卒）が相次いで教授陣に加わり、スタッフは一新される。以来八九年に学長に就任するまで一五年近

く主任を務めた原は、ロシア語学科の刷新に努め、それまで形骸化された感のあつた語学、文学、事情の三部門に、専門性の高い人材を配置し、語学のみ教育体制からの脱皮をはかった。

ソ連でペレストロイカのはじまる八五年までの教員の配置は語学Ⅱ磯谷孝、中澤英彦（七五年採用）、文学Ⅱ原卓也、飯田規和、事情Ⅱ新田實、志水速雄。磯谷は独創的な作文教程の編纂や体の研究から、文化記号論へと進み、その方法を駆使して多くの評論を著している。

また七五年東京外大大学院修了と同時に助手となつた中澤は、動詞（運動の動詞と体）の研究ですぐれた業績をあげる一方、NHKラジオロシア語講座の講師として入門編を担当、ロシア語の面白さを学生や一般の学習者に植えつけた。

原卓也は二十三歳にしてシヨロホフの大長編「静かなドン」（新潮社、一九五四年）を翻訳、その後もトルストイ、チェーホフなど原稿用紙一〇万枚以上の翻訳を成し遂げ、その訳文の美しさ、正確さでは右に出る者がない。またソ連における人権問題にも強い関心を持ち、ソルジェニツィンやサハロフ擁護の講演会やキャンペーンを展開し、その中で学生の間にもソ連・東欧研究会（略称セルグ）が結成され、そのメンバーから作家の島田雅彦や政治学者外池力（明治大学助教授）、ロシア文学者清水俊行（神戸市外大助教授）が出ている。また一九七〇年に「ロシア手帖」の会を結成し、講演会活動を通じてロシア文学の普及に努める一方、機関誌「ロシア手帖」は新聞雑誌に載つたロシア関係論文・記事の貴重なビブリオグラフィとして注目され、七一年の創刊号から九五年の四〇号まで続いた。このビブリオグラフィ作成作業に自主的に参加した学生のなかから、桑野隆（昭和四十五年卒）東大教授、渡辺雅司（昭和四十四年卒）、亀山郁夫（昭和四十七年卒）本学教授、安岡治子（東大助教授）をはじめ、多くの研究者が輩出していることをつけ加えておく。

飯田は日ソ翻訳懇話会での活動を経て外語に赴任、タルコフスキーの映画で有名になったレムの「惑星ソラリス」をはじめ、チンギス・アイトマトフの小説の翻訳を数多く手がけ、その温厚な性格で女子学生に慕われた。

新田は、NHK国際局で培った日本人離れたロシア語の運用能力を駆使して、テレビロシア語講座の初代講師を務め、「ロシア語手紙の書き方」(ナウカ社、一九七九年)を著す一方、ソビエト社会学にも造詣が深く、マスコミの言語を学生に伝授し、多くのジャーナリストを育てた。停年前に留学生日本語教育センター長となり、センター教員の身分改善など、抜本的な改革を行った功績は今も高く評価されている。

また一九八四年に急逝した志水速雄は、六〇年安保時代に全学連中央執行委員兼国際部長として勇名を馳せ、外語卒業後清水幾太郎の感化を受け、ソ連政治や日露関係を専門にし、「ペテルブルグの夢想家」(中央公論社、一九七二年)というドストエフスキー論をも著す多才ぶりを発揮した。主著「現代ソ連国家論」(中央公論社、一九七一年)のほか、「日本人はなぜソ連が嫌いか」(山手書房、一九七九年)という挑発的なタイトルの本を出し、話題となった。ともあれペレストロイカを待たずして世を去ったことが惜しまれる。

なお一九七七(昭和五十二)年に外国人教師のポストが復活し、学生たちに現地のいきいきした情報とホットなロシア語の知識が伝えられるようになった。その顔ぶれを列挙すると、ユーニエフ(一九七七)、バルーエフ(七八―七九)、チトワ(八〇―八二)、スタルシーノワ(八二―八三)、ロマーノワ(八四)、マズルケーヴィチ(八五―八六)、ヴォロージナ(八七―八九)、アルトゥホーフ(九〇―九三)、チェルニャケーヴィチ(九四―九五)、ドウガーノフ(九六、九七年一時帰国中に急逝)、シエフテレヴィチ(九八)。九九年、目下ロシアで最も注目されている新進作家ソローキンが一年の契約で着任する。

ロシア語学科の学生は、従来からさまざまな分野の大学院に進み、研究者となる率が高かったが、原主任のもとで

教育の専門化が進み、加えて教員・学生間の壁が取り払われ、両者の親密度が増したこともあって、文学、語学、事情（歴史、経済、思想史等）の研究者をめざす学生が増え、その傾向はロシア語学科の伝統として今も受け継がれている。

八〇年代後半になると、ロシアのペレストロイカに呼応するように、ロシア語学科の編成も大幅に変わっていく。志水速雄の後任として事情担当の渡辺雅司（ロシア思想史）が着任、一九八八年には臨時増募によって安岡治子（ロシア文学、九二年東京大学に移籍）、九〇年には前年に学長に就任した原卓也の後任としてロシア文学・芸術論の亀山都夫が加わる。

さらに相次いで停年退官した飯田規和（九一年）、新田實（九三年）の後任として、ロシア史・民族問題が専門の高橋清治とロシア経済史の鈴木義一（ともに東京大学出身）が着任したほか、外国人任用法によって「古今集」の訳者として著名な日本文学研究者のアレクサンドル・ドーリン（九三年―）が採用されることになる。

十一 現状と人材

こうした専任教員の交替によって、ロシア語学科の年齢構成は若返り、原体制以来の学生との交流はさらに密度を増し、一九九五（平成七）年以降の新カリキュラムのもとでも、専攻のロシア関係で卒業論文を執筆する学生の数が非常に多く、どのゼミナールも活気に満ちていることは特筆に値しよう。また新スタッフの加入により、それ以前よりさらに専門化が進んだため、大学院進学率は本学一を誇っている。

一九九一年には、言語学の千野栄一教授の永年の努力が実を結んで、チェコ語とポーランド語が日本で最初の専攻